

平成二十四年度 入学試験問題

国 語

第一回

【注 意】

- 一、試験時間は五〇分です。（八時五〇分～九時四〇分）
- 一、問題は一ページから七ページまでです。
- 一、解答はすべて解答用紙の解答らんに入入してください。
- 一、問いの中で、字数の指示がある場合は、句読点、記号等も字数に含みます。
- 一、解答用紙に受験番号、氏名を記入してください。



洗足学園中学校

1 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

いま、「先進国」では「IT革命」が急速に進んでいます。ITというのは「Information technology」、つまり「情報（通信）技術」のことです。

確かに、ITをはじめとするさまざまな文明の利器の発達により、昔とは比較にならないほどの容易さで、多量の情報を得ることが可能になり、その結果、現代人は昔の人間とは比較にならないほど多量の知識、情報を持つています。

いままでも人類が獲得した情報収集手段を歴史的に、また極めて概略的に列挙しますと、直接観察・見聞↓書籍↓ラジオ（音声）↓テレビ（音声と映像）↓インターネット（マルチメディア）となります。これは、そのまま、情報収集の「効率」と「容易さ」の向上の順番です。

まず、書籍のお蔭で私たちは時間（時代）と空間（地域）を超えた情報を得ることができるようになりました。さらに、カッジと印刷術の発明は情報を量ばかりでなく、時間的、空間的にも著しく拡大したのです。そして、テレビは人類の知識量を飛躍的に増大させました。最近では、パソコンあるいは携帯電話を通じてインターネットを利用すれば、ありとあらゆる情報が瞬時に、極めて容易に得られるようになっていきます。

しかし、人間の脳の活動と情報の意味化において、文字メディアとテレビのような映像メディアとは根本的に異なります。

文字メディアの場合、まず文字を、そして読むことを学び、シユウトクしなければなりません。また、文字というそれ自体は具体的な像を持たない記号の羅列である文、文章から場面や状況や内容を自分自身の頭の中で具体化しなければならぬのです。自分自身による「想像」、組み立ての作業が必要なのです。そのためには「心の眼」が不可欠です。

ところが、テレビのような映像メディアは、具体的な像を音声つきで与えてくれます。自分自身による「想像」のような作業は不要なのです。したがって、その分、知識の増量は容易で迅速でもあるわけです。

この「想像」の作業が必要であるか否かは、脳の活性化、智慧の発達のことを考えれば、決定的な違いです。ITの発達によって、人間は知識を飛躍的に増したのですが、それに比例して智慧を低下させたように思われるのです。智慧は自分の頭で考えることよって身につく能力だからです。ちなみに「知識」は「ある事項について知っていること」で、「智慧」は「物

事の道理を悟り、適切に処理する能力」です。

A、情報収集手段が直接観察・見聞や書籍などに限られていた昔は知識の多寡がその人物の価値を決める大きな要素でした。ものは知りは大きな価値を持つていましたし、ソクケイもされました。B、現在のようになりITが発達した社会では、知識の多寡については、人間がどのように頑張っても、膨大な記憶量をもつパソコンやインターネットに絶対に叶わないのです。つまり、人間の価値として、知識の多寡は大きな意味を持たないのです。人間の価値は智慧の多寡にかかっているのです。

フランスの思想家・モンテーニュが「知識がある人はすべてについて知識があるとは限らないが、有能な人はすべてについて有能である」といっています。その通りです。また、ニュートンと並び称される物理学者・アインシュタインは「想像力は知識よりも重要である。知識には限界があるが、想像力は世界を包み込むことさえできるからである。」といっています。

私は、みなさんに、世界を包み込むことさえできる想像力、物事の道理を悟り、適切に処理できる智慧を身につけていただきたいと思うのです。このような(4)は、教科書を暗記しただけでは決して身につかないのです。筋道立てて考える、ということこそ智慧の真髄なのです。

もちろん、私は「知識は不要である」などといっているわけではありません。私たちが勉強によって学ぶべきことは、考える基礎となる普遍的な土台です。知識は大切です。しかし、教科書に書いてあることを、そのまま機械的に暗記しても（テストの好セイセキにはつながるかも知れませんが）、それだけでは何の役にも立たないのです。

誰にとっても「暗記」は楽しいことではありませんが（少なくとも私は大嫌いです）、「自分の頭で考えること」は楽しいし、人生を豊かにしてくれます。C、智慧は人生を楽しく、豊かにしてくれます。また、智慧の有無は人生の「成否」を分けることも確かです。念のために書いておきますが、ここで私がいう人生の「成否」の要素は「出世」できるかどうか、「金持ち」になれるかどうか、というようなことではなく（そのようなことも人生の「成否」の一要素であることは確かでしょうが）、人生の充実ぶり、物心両面の（究極的には心の）豊かさのことです。

D、いままで何度も「考える」という言葉を使ってきたのですが、じつは、「考える」ということは、それほど簡単なことではないのです。考えることの難しさは「知識を得ること」に比べ、「智慧を身につけること」

が難しいことに直結します。

いくつかの国語辞典を調べてみますと、「考える」はさまざまに説明されていますが、私が考える「考える」に一番近い説明は「経験や知識を基にして、未知の事柄を解決（予測）しようとして、頭を働かせる」（『新明解国語辞典』）です。「考える」の基本は、「経験」と「知識」です。それらを「基」にして「頭を働かせる」のが「考える」です。堂々巡りのようですが、この「頭を働かせる」というのがまた厄介です。

日本の代表的「知性」ともいえる小林秀雄は、「考える」とは物に対する単に知的な働きではなく、物と「シンミ」に交わることだ。物を外から知るのではなく、物を身にかけて生きたる、そういう経験をいう。」と述べています。ここでも、やはり「経験」が大切です。もちろん、誰でも「経験」を持つのですが、それが漫然とした「経験」では「考える」基本にはならないのです。

私は、「考える」原動力は「疑問を持ち続けること」だと思っっているのですが、じつは、ゲーテが「人間に知的な欲求がはじめて萌してくるのは、その人間が重要な現象に眼を留め、注意を惹かれた時である。この知的な欲求が持続するためにはさらに深い関心が生じて来なければならぬ。」と述べていますように、「疑問を持ち続けること」は簡単なことではないのです。

つまり、問題は「その人間が『重要な現象』に眼を留められるかどうか」であり「注意を惹かれるかどうか」なのです。また、「その『現象』を重要と思えるかどうか」なのです。さらには「知的欲求を持続する」ためには、まず「持続」以前に、「知的欲求を持てること」、「強い関心が生じて来ること」が必要です。結局、ここでも、⁽⁵⁾堂々巡りのような話になってしまいます。

結局、私は、子どもの頃のような「なぜ？」という問いこそ、人に考えることをさせ、人生を飽きさせないエネルギーの源だと思っうのです。そして、その「なぜ？」は常識や、世間体や、「権威」とらわれない素直な観察から生まれると思います。その「素直な観察」の基盤は「感性」です。

（志村史夫『文系？ 理系？ 人生を豊かにするヒント』）

★多寡……多いことと少ないこと。

問一

——(1)「ITをはじめとするさまざまな文明の利器の発達」とありますが、これによって情報収集に関して、何がどのように変わりましたか。本文中の表現を用いて、二十字以内で説明しなさい。（句読点や記号も含み、必ず一マスを用いること）

問二

——(2)「人間の脳の活動と『情報の意味化』において、文字メディアとテレビのような映像メディアとは根本的に異なります。」とありますが、筆者は映像メディアについて文字メディアとどのような点が異なるかと言っていますか。本文中の表現を用いて、その理由とともに七十五字以内で説明しなさい。（句読点も含み、必ず一マスを用いること）

問三

——(3)「私は、みなさんに、世界を包み込むことさえできる想像力、物事の道理を悟り、適切に処理できる智慧を身につけていただきたいと思うのです。」とありますが、それは筆者が智慧を人間にとつてどのような意味を持つものと考えているからですか。本文中の表現を用いて六十字以内で説明しなさい。（句読点も含み、必ず一マスを用いること）

問四

——(4)に入れるのに、最もふさわしいものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 想像力や道理
- イ 想像力や智慧
- ウ 道理や知識
- エ 知識や智慧

問五

——(5)「堂々巡りのような話」とはどのような話ですか。もっともふさわしいものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 同じことをくり返して先に進まない話
- イ 同じことをくり返すうちに内容が深まる話
- ウ 力強くくり返すうちに理由が明確になる話
- エ 力強くくり返すことで説得力がなくなる話

問六

A 〽 D に入れるのに、最もふさわしいものを次のア～エの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア ところで イ もちろん ウ つまり エ しかし

問七

——(ア)〽(オ)のカタカナを漢字に書き直しなさい。

問八

本文の内容に合うものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア「考える」ということがそれほど簡単なことではないのは、どんな形でもいいからまずは経験することが必要となってしまうからである。

イ「考える」ということがそれほど簡単なことではないのは、重要な現象に眼を留めて生まれた疑問を持続することが困難だからである。

ウ「考える」ということがそれほど簡単なことではないのは、知的欲求や強い関心のない状況でも頭を働かせなければならないからである。

エ「考える」ということがそれほど簡単なことではないのは、常識や世間体や率直な観察から生まれる疑問をもつことが難しいからである。

② 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

(1) その晩、海生はなかなか寝つけなかった。

横になったまま、静かな波の音をずっと聞いていた。

木造船の、しかもマホガニーですばらしい曲線の作つてある船は、波のあたりが違ふ——おじいちゃんの言っていたことが、しきりと思ひ出された——柔らかな、波にそう音なんだ、と。そのとおりだった。

海を走っているときにアイオロスにあたる波の音は、わくわくと躍る胸の音のようにリズムカルだ。

★係留してあるときにあたる波の音は、とてもやさしい。やさしくて、心の深いところにまでしみ通るような音だ。

海生はもう一度寝返りを打って、耳を寝台にびったりくっつけた。船底にふれる波の、ひそやかなやさしい声が聞こえてきた。

A いつまでも忘れないだろう、と海生は思った。この波の音。

思いきり吸いこんだ潮の香り。

目が痛くなるほどまぶしかった空。

たくさんの思ひ出を隠した小さな入り江。

いちばんのなかよしたちと思ひきり笑って過ごした時間。

——きらめくような夏の日。

夜明け前には、★クルー全員が起き出した。

風間ジョーがてきぱきと指示を出しながら、すばやく動いた。田明もき

びきび働いた。八千穂もロープワークを手際よく手伝った。

「フセ」の号令をかけられたウイスキーは、おとなしく海生の足下に伏せて、

海生の顔を見上げていた。

海生は、舵輪を握る手に力を入れた。

海生の掌には、B ほんの少しだけ大きくて重い、舵輪。

——いつかはおじいちゃんのように軽々と回すことができるようになるだろうか。

「風を見て、波を聞け。」

海生はそうつぶやくと、まっすぐに、前を向いた。

朝がゆっくりと明けてきた。

30

25

20

15

10

5

あけがたの光が波頭を白くきらめかせる海へ、アイオロスは乗り出した。

「シート、ひけー！」

湾の入り口のテトラポッドに近づくと、風間ジョーが、明るい声で指示を出した。

湾を抜けたら、エンジンを切つて、帆を上げるのだ。

田明が船首でさつと動いた。風間ジョーも身軽に動いた。おじいちゃんと同じく、風間ジョーも、ごく自然体で船が操れるようだった。いつも何を操作しているのかわからないくらい、なめらかに動く。

海生は風を見ながら、慎重に舵を切った。

白い帆がするすると上がつて、いっぱい風を(2)

アイオロスは風色湾を出て、相模湾を横切つていった。

目的地は大島だ。

悪い風はみんな、風の神の袋に詰められたような朝だった。

アイオロスはみごとに風をつかんで走っていた。C 風の靴になったように。

風の靴は、軽々と海を駆けていった。

ずっと駆けていった。

このうえなく頼りになる★スキッパーはクルーに信頼されて、裏切られることなど、D なかった。アイオロスは順調に目的地へと向かつていった。

★三人と二匹の仲間、それぞれの持ち場をきちんと守つて、アイオロス

を走らせた。

もつとも、船酔いした一匹は、ずっと伏せたままココクピットを守つ

ていた。

昼前には大きな島影が迫つてきた。

大島だ。

船首にいた海生は、ココクピットの風間ジョーを振り返つた。

風間ジョーはきびきびと指示を出して、帆を下ろした。

大島だ。

船首にいた海生は、ココクピットの風間ジョーを振り返つた。

風間ジョーはきびきびと指示を出して、帆を下ろした。

風間ジョーはきびきびと指示を出して、帆を下ろした。

60

55

50

45

40

35

アイオロスは静かに足を止めた。

海生はポケットから瓶を取り出して、みんなに振ってみせた。

田明が、船首に行こうとした八千穂をすばやくつかまえた。

「じっとしてろよ。おじいちゃんは海生に、海の上で、まずは一人で読め。って書きのこしてたんだから。」

「何が書いてあったか、あとで、教えてくれると思う？」

「たぶんな。でも、うるさく聞くなよ。」

八千穂はしぶしぶうなずいて、足下のウイスキーをちよんちよんとついた。船酔いしてぐったり寝ている犬に、八千穂は念入りに言い聞かせた。

「ウイスキーもいい子で、じっとしててよ。大事な手紙なんだからね。一人で読ませてあげるんだよ。うるさくしちゃだめだよ。」

ウイスキーは上目遣いで八千穂を見たが、またすぐ頭を前足の間に埋めってしまった。

ウイスキーの姿を見て、八千穂は自分も眠くなってきた。昨日も今朝も、あけがたに起きたからだ。キャビンに下りてみると、キャブテン風間がもうベンチにあおむけになって仮眠をとっていた。ずいぶん晴れ晴れとした寝顔だった。

八千穂も向かい側のベンチに座ってテーブルにもたれたが、まもなく、ことんと頭を落とした。

思いきり遠くまで、瓶を投げた。

大きいほうの瓶だ。

日の光を反射してきらめきながら、瓶は海に落ちていった。白い波の間に、瓶はいつとき姿を隠したが、すぐにまた浮かんできた。

黒潮に乗れば、遠い国まで流れていくだろう。

おじいちゃんの好きだった人の国に届くだろうか。

その人も、もうこの世にはいないかもしれない。しかし、海生みたいな孫や子どもたちが——そんな誰かが、いつか、遠い国の浜辺に打ち上げられた瓶を見つけるかもしれない。

水平線の上には、雲ひとつない空が広がっていた。青い青い空だ。

この海も、この空も、その国に続いている。

遠い浜辺で、瓶を拾い上げる小さな手を、海生は心に浮かべた。

95

90

85

80

75

70

65

波間の瓶から目を離さないまま、青い瓶のコルク栓を抜いた。

「おれが死んだら、海の上で一人で読め。」となんでもないことのように言ったときのおじいちゃんの声と、その横顔にきつく照りつけていた西日を思い出しながら。

中の紙を取り出して広げてみると、左半分は英文が印刷してあって、右半分にはおじいちゃんの字で、ところどころ何か書いてあった。どうも訳してあるみたいだった。英文はパラグラフ三つ、およそ五十行くらいあったが、日本語がつけてあるのは、その三分の一ほどだった。

最初に、★THE WHY OF THE WIND、最終行のあとに、—by Laura Riding と書いてあった。

改行の仕方から、詩のように見えた。一連目には訳がつけてなかったが、二連目の最初のあたりは、次のように訳してあった。

風が走るとき、我々も風と走る。

風に心をつかまれてしまうと、

自分が風ではないことを忘れてしまう。

そして三連目は、おわりの数行をのぞいて、ほとんど訳してあった。

我々は、もつと知らなければ、

自分が何であり何でないかを。

我々は、風ではない。

さすらいの気ままさに惹かれる、

きまぐれな心境でもない。

もつと、はっきり見分けなければ、

我と彼の違いを。

「我々でないもの」は、たくさんある。

たくさんある。

「我々が、ならなくてもいいもの」は、たくさんある。

それだけだった。ほかには何も書いてなかった。

「自分が、何であり何でないか」

130

125

120

115

110

105

100

「我々でないもの。我々が、ならなくてもいいもの。」

くりかえし読むうちに、おじいちゃんに言われた言葉がよみがえってきた。いつだったか、お兄ちゃんと比べられてすねた海生を連れ出してくれたときのことだ。

「みんな、ほくのことなんかだめだと思ってるんだ——どうせ、おにいちゃんみたいにはできないよ。」と半泣きで訴えたら、⁽⁴⁾おじいちゃんが怖い顔になった。

「……おまえは、おまえ以外の人には、なれないんだ。」

おじいちゃんは静かに、でもはっきりと言った。

「おまえは、おまえなんだ。自分以上でも以下でもないおまえ自身——大切に、生きていけ。」

〈そうなんだ。ほくらは風ではない。風がほくらを連れ回すのでもない。

ほくらが、風を見、風を聞き、風を読む。

そうして、自分の進む針路を決めるんだ。

ほんとうに行きたい方向に向かつて。〉

⁽⁵⁾海生は、折たたんだ紙を青い瓶に戻して大事にポケットにしまった。

海に投げた瓶は、詩に⁽⁶⁾気をとられている間に、もう見えなくなっていた。

遠い波間で、太陽の光を反射しては光るものがあった。

海生は伸び上がって、光を見つめた。

きらめく光に白い波がかぶさった。見る間に波は大きなうねりになって、

光を飲みこんだ。うねりの向こうで、また何かきらめいた。

そんなふうにして、瓶は海を渡っていくのだろう。

〈遠くまで行け。

おじいちゃんの好きだった人の国まで。

おじいちゃんの代わりに。

遠く、ずっと遠くまで行け。〉

(朽木祥 『風の靴』)

160

155

150

145

140

135

★係留……………つなぎとめること。

★クルー……………船の乗組員。

★波頭……………高くもりあがった波のいただき。

★スキッパー……………小型船の船長。

★三人と二匹……………幼い八千穂は動物にみたてられている。

★「THE WHY OF THE WIND、…」The Poems of Laura Riding、1938、1980

Laura (Riding) Jackson, Peasea Books/

New York (訳は筆者によるもの。)

問一

——(1)「その晩、海生はなかなか寝つけなかった。」とありますが、このときの海生の気持ちとして、この先の航海への興奮と何が考えられますか。最もふさわしいものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 友と過ごした夏をふりかえり、その思い出で心が満たされている。

イ 波の音がおじいちゃんを思い出させ、しみじみと悲しんでいる。

ウ 船の外の景色と夏の思い出が重なり、美しさにうっとりしている。

エ 夏のすばらしい日々を思い出し、それが終わることを焦っている。

問二

(2) に入る語として最もふさわしいものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア しまった。 イ はらんだ。 ウ まいた。 エ たてた。

問三

——(3)「一人で読め。」とありますが、おじいちゃんがそのように言ったのはなぜですか。最もふさわしいものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 手紙というものはそもそも一人で読むものであるということ伝えてきたから。

イ 他でもない自分だけが海生のことを理解しているということ伝えてきたから。

ウ 自分自身は自分一人で考えなければならぬということ伝えてきたから。

エ 大人になるとだれもが一人で生きていかなければならぬことを伝え

たかったから。

エ 大人になるとだれもが一人で生きていかなければならぬことを伝え

たかったから。

問四

——(4)「おじいちゃんが怖い顔になった。」とありますが、それはなぜですか。本文の表現を用いて四十五字以内で答えなさい。(句読点も含み、必ず一マスを用いること)

問五

——(5)「海生は、折りたたんだ紙を青い瓶びんに戻もどして大事にポケットにしまった。」とありますが、ここに見られる海生の決意を四十字以内で説明しなさい。(句読点も含み、必ず一マスを用いること)

問六

——(6)「気」とありますが、「気」を使った次の一～五の慣用句の意味を、後の「意味」ア～オの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

- 一 気にかける 二 気をくばる
- 三 気をはく 四 気がとがめる
- 五 気がおけない

【意味】

- ア えんりよのいらない。
- イ 心配する。
- ウ 心の中で悪かったと思う。
- エ いろいろ心づかいをする。
- オ 元気のよいところを示す。

問七

□ A □ D に入れるのに、最もふさわしいものを次のア～エの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

- ア まるで イ きつと ウ むろん エ まだ

問八

本文の内容に合うものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 海生は、子どもたちだけの航海やおじいちゃんからの手紙を通して、友情の大切さに気づくことができ、一回り大きく成長していった。
- イ 海生は、田明でんめいとのかかわりやおじいちゃんからの手紙を通して、かけがえない自分の存在に気づくことができ、一回り大きく成長していった。

ウ

海生は温かい友人たちやおじいちゃんからの手紙を通して、もう一度自分を受け入れることができ、一回り大きく成長していった。

エ

海生はおじいちゃんとの思い出や手紙を通して、一度は失った自分らしさをとりもどすことができ、一回り大きく成長していった。